

活動報告

聴覚文化に関するトークイベント報告

「アナウンサーと文学者が音の文化について真面目に考えてみた」

「物語る音 物語る声」

堀田 あけみ

今年度、聴覚文化に関するトークイベントを2回行った。いずれも、広瀬正浩准教授を進行役としたクロストークである。

第一回として、6月30日（金）の5限目を使い、「アナウンサーと文学者が音の文化について真面目に考えてみた」を開催した。ゲストとして招いたのは中部日本放送のアナウンサーである永岡歩氏である。現在、同社の看板アナウンサーとして、テレビの仕事も多い永岡氏だが、聴覚文化をテーマにする今回、主な題材としたのは、火曜から金曜まで22時台に放送されているラジオ番組『ナガオカ・スクランブル』である。

永岡氏がアナウンサーを目指した理由から始まり、ラジオというメディアをどのように考えているのか、テレビとの違いはなにかといったテーマで、フロアからの発言も活発になされた。ラジオの特徴として、聴取者との距離の近さ、双方向性、いわゆる「帯番組」はルーティンワークとして日常に組み込まれていること等があげら

れた。また、街に出て人の声を聞くことも番組の大きな要素となっており、そこから新たなリスナーも生まれているという話もあった。参加者は他学部、他大学も含めて50名ほどであった。中には、『ナガオカ・スクランブル』を、一度も聞き逃したことがないほどの熱心なリスナーもいた。

第二回は、12月15日（金）の5限目に「物語る音 物語る声」と題して開催された。ゲストとして招いたのは、NHK名古屋放送局のドラマディレクター・佐藤譲氏、小野見知氏である。佐藤氏は五十代のベテラン、小野氏はテレビドラマのディレクターとしては、この時期に放映中であったテレビドラマ『マチ工場のオンナ』がデビューという顔ぶれとなった。佐藤氏が演出を担当した『よい宵の祭り』と小野氏が演出した『どこかで家族』の2作のラジオドラマを中心とし、「声による物語の表現」についてのクロストークが展開された。

参加者は、他学部や他大学からも含めて15名と少数だったため、学生も参加しての意見交換が活発に行われ、キャスティングや演出方法、映像編集等、裏話も含めて、様々な話題について討論がなされた。

大きなテーマは聴覚文化であるが、キャリアに関する学生の興味が高いことから、それぞれの職に就くにあたっての、動機とプロセスについても語ってもらった。「中学生のときに、好きなアイドルにインタビューするアナウンサーを見た」ことがアナウンサーを志願した理由であったり、「高校生のときに初めて帝国劇場に行ってみた『エリザベート』の舞台で、内野聖陽さんに一目惚れして、一

緒に仕事をしたいと思った」「唐十郎に憧れたけど、生活の安定が第一と考えて、NHKと県庁職員の、どちらの内定をとるか悩んだ」といった発言から、誰もが持つ強い憧れが、仕事の原動力になっていることが、学生たちには大いに参考になったのではないかと思われる。

今後も、「聴覚」「物語」をキーワードに様々な展開をしていく予定である。